

【実践研究】

# 大学スキー実習における学習者間の教え合いの活性化 —バディシステムの導入とリフトでの学習カードの活用—

中西 匠 松本 裕 史

The revitalization of peer learning in skiing practice classes in university  
—introducing the buddy system and utilizing learning cards in ski lifts—

Takumi Nakanishi, Hiroshi Matsumoto

## Abstract

Revitalization of peer learning in university skiing practice classes by introducing buddy system and utilizing learning cards while riding ski lifts.

In physical education classes, peer learning among students plays an important role in integrating their awareness of skills and proficiency at techniques, thus promoting autonomous learning and improving communication skills. During skiing classes, training is carried out by instructors with small groups of students. Although there is a communication/receptive manual in place for this type of training, methodologies that promote peer learning among students are still at an early stage of development.

This study investigated revitalization of peer learning among students by introducing a method whereby students taught each other during classes utilizing a buddy system. With this system, the students were split into pairs, with the pairs rearranged for each training section, while learning cards were also developed for review while riding the ski lift. Implementation of these methods resulted in promotion of peer learning among students, the effectiveness of which was also verified by positive feedback received from them.

キーワード：スキー実習, 教え合い, バディシステム, 学習カード

key word : skiing practice classes, peer learning, buddy system, learning cards

## I. はじめに

体育授業においては、学習者どうしの教え合いが重要な意味をもつ。学習者は、一緒に学ぶ仲間と教え合うことにより、①課題を共有する仲間からの的確で頻繁なアドバイスによる効率的な技能習熟 ②「教える」—「教えられる」プロセスにおける技術認識と技能習熟の統一 ③自ら課題を解決し、学習を進めていくという自律的学習 ④コミュニケーションの促進 ⑤異質協同で学ぶことによる能力観の変革<sup>1</sup>などを果たすことができる。

ゲレンデで展開されるスキー実習においては、指

導者1人に対して数名から10名程度の小規模のグループを組んで指導が行われることが一般的である。多くの場合、指導者による伝達-受容型の指導が行われ、指導系統を示したマニュアルは整備されているものの、学習者どうしの教え合いを促進させる方法論は開発されていない。

本研究の対象となった大学ではこれまで、スキー実習の講習を効率的で満足度の高いものにするため、スキー実習指導方法研究グループを組織して指導方法の開発に集団的に取り組んできた。その成果として、初心者指導のための指導マニュアルづくり<sup>2</sup>、グループと指導者を講習ごとにローテーショ

ンするグループ・ローテーション指導<sup>3,4</sup>などの指導方法を確立してきた。本研究はこれら一連の研究成果を受け、スキー実習における指導方法のさらなる開発を意図して行われた。

本研究では、学習者にペアを組ませ講習セッションごとにペアを組みかえるボディシステム、リフトで移動する際に学習カードを活用しながらペアで教え合うリフト学習を導入し、学習者間の教え合いの活性化を試みた。本研究の目的は、ボディシステムと学習カードを用いたリフト学習を取り入れたスキーの授業実践が、学習者どうしの教え合いの活性化に結びつくのかを実践的に明らかにし、スキーの授業における学習者間の教え合いを活性化させる際の基礎資料を得ることである。

## Ⅱ. 方 法

近畿圏の女子大学および女子短期大学、健康スポーツ系学科のスノースポーツ実習において、初心者6人を対象に実施されたスキーの授業実践を分析対象とした。

本研究の目的を達成するために内容・教材・方法を計画した授業を実施し、実践内容・方法の記録、ゲレンデ・リフトで撮影された動画、講習ごとの振

り返しレポート、実習日誌、実習後の技能習熟テストの結果から、その成果と課題を分析した。

## Ⅲ. 実践の概要

### 1. 対象・期間・実施場所

本研究の対象となったのは、近畿圏の女子大学および女子短期大学の健康スポーツ系学科学生で、スキーの経験が全くない、もしくはほとんどない初心者6人であった。6人のうち4人(A, B, C, D)は大学2年生、2人(E, F)は短期大学1年生であった。指導者はスキー指導歴17年の男性教員であった。実習期間は2009年2月23日から2月27日の5日間、実施場所は長野県志賀高原高天ヶ原スキー場を中心とする一帯のスキー場であった。

### 2. スケジュールと講習内容

表1は、講習ごとの講習内容、使用ゲレンデ、天候を示している。1日目午前から4日目午前までの7講習は班別の講習が行われ、プルークボーゲン、シュテムターン、パラレルターン大まわり、パラレルターン小まわりの技能講習を行った。4日目午後にはテスト、5日目は終日ツアーを行った。

表1. 授業の概要 (スケジュール, 講習内容, 使用ゲレンデおよび天候)

日程	講習内容	使用ゲレンデ	ボディ	天候	
1日目	午前	用具なれ プルークファーレン プルーク斜滑降	高天原		雪
	午後	プルークボーゲン	高天原		雪
2日目	午前	パラレルターン導入 (中まわり)	高天原	ボディ	晴
	午後	パラレルターン滑り込み ギルラン ンデ ストック導入	タンネの森 天狗林間コース	ボディ	晴
3日目	午前	プルーク小まわり	高天原 タンネの森	ボディ	雨
	午後	小まわり滑り込み シュテムターン	天狗 タンネの森	ボディ	雨
4日目	午前	まとめの練習	高天原	ボディ	曇 ガス
	午後	テスト ミニツアー	高天原 天狗林間コース		ガス
5日目	午前	ツアー	天狗→奥志賀方面→東館→ブナ→ジャイアント下		曇
	午後	ツアー	西館→一ノ瀬→タンネの森→高天原		雪

### 3. 教え合いを活性化するための手だて

#### 1) バディシステム

学習者は講習中、2人1組になってペアで学習活動を行った。この学習法を、水泳の安全管理法に学んでバディシステムと呼ぶ。7回の班別講習のうち、1日目午前・午後を除く5回の講習をバディで行い、バディの相手は講習毎に組み換えた。5回の講習ですべてのメンバーとバディを組む予定であったが、組み合わせがうまくいかず、一度も組まなかった組み合わせ、二度組んだ組み合わせがある。

指導者は、練習メニューの中にペアによるミニトレイン（1人の学習者の真後ろをもう1人の学習者が追尾する）を導入する、2人でのミニミーティングの時間を設定するなどして、バディでの学習を促した。学習者は、ゲレンデでの講習中・待ち時間・リフトでの移動中に、指導者の指導言やお互いの現状の確認、アドバイスなどを積極的に行うことが求められた。

#### 2) 学習カードを用いたリフト学習

ゲレンデでの講習では、必ずリフトに乗る機会がある。教え合いを重視した本実践では、隣り合わせに座って一定の時間を共にするリフトでの移動時間は非常に重要な場になる。スキー実習を体育の授業ととらえれば、練習をするごとにミニミーティングをする場が設定されているようなものである。

本実践では、リフトでの教え合いをさらに活性化するため、実習要項に掲載されている各ターンの図をコンパクトにまとめた学習カード9枚を各バディに1束持たせた。図1は、本実践で使用した学習カードである。学習カードは、スキーウエアのポケット

に入るサイズでパウチ加工されており、図毎に通し番号を付けて束にした。グローブを着けたまま取り出せるよう、カードの束はスキーウエアのファスナーにフックで連結してポケットに収納できるように作成した。

指導者は、リフトに乗る前に参照してほしいカード番号とチェックしてほしい点を伝え、学習者2人でそのカードの図を見ながらお互いの滑りをチェックしたり、アドバイスしたりした。

#### 3) ミーティングにおける課題の確認

1日の講習が終わるごとに、夜宿舎で班ミーティングを行った。そこでは、講習時に撮影した学習者の滑りのビデオを見ながら、現状と明日の講習の課題を確認した。現状を確認する際には、バディによる講習中の解説が行われた。

指導者は、要項の図（学習カードと同様のもの）を用いて技術のポイントを整理し、翌日のリフト学習の手がかりを提供した。

### 4. 技能習熟の評価

実習4日目の午後に、技能習熟を評価するテストを行った。技能テストとして、日本職業スキー教師協会(SIA)のインターナショナル・テスト検定(セミシルバー)を受験させた。検定種目はシュテムターン、パラレルターン、初歩的なウェーデルンの3種目であり、テスト検定に使用されたゲレンデは幅30m以上、長さ100m、斜度10~20度の中斜面であった。テストは各種目1回ずつ実施した。評価はSIA検定員がそれぞれの種目100点満点で行った。

## IV. 実践の結果

### 1. 教え合いの実態

#### 1) リフト上での会話の様子

表2は、学習カードを用いたリフト上での教え合いをビデオで撮影して再現した会話内容の例(BとCの会話)である。2日目午後の講習で、それまでストックなしで講習していたのをこの講習からストックワークを導入したため混乱しがちな時間であるが、カードを手掛かりに自分なりの表現で助言しようとしている様子が見える。

#### 2) 教え合いの内容

表3は、各講習が終わる度に「言ってあげたアドバイス」「言ってもらったアドバイス」を記録させ



図1 リフトでの教え合いに用いた学習カード

表2. リフトでのカードを用いた教え合いの場面 (BとCの会話)

学習者	発言
C	(パラレルターンの連続図を示したカードを指さしながら) こういってるから、もっとギューで、ここで真っすぐ (ニュートラルゾーンで) 力抜いて、また曲がるときにギュー。
B	ギュー?
C	ギューじゃなくてギューって感じ
B	(ストックワークを解説するカードに替えて) ○○ちゃんのストックは、なんかカーブするときに自分の内側に突く感じがいいと思う。(ストックを突くしぐさをしながら) 左こう曲がる時はこっちやし、こう曲がる時はこっちやし…
C	うん
B	自分の体の内側に突くのが…
C	うんうんうん
B	基本やねん。基本ていうかわかりやすい。
C	あー
B	たまに逆になってた。
C	あーわかった。右右左左で…

た振り返りレポートの記述内容の一覧である。学習者欄の記号は、最終日テストおよびその直前のシステムターン、パラレル小まわり、パラレル大まわりのできばえからみた、班内での相対的技能レベルをあらわす。◎は相対的に高く、○は標準的、△は相対的に低いことを示している。

バディシステムを取り入れた5回の講習のうち、「言ってあげたアドバイス」欄にはAの3日目午前・午後を除いて、学習者はバディに対して何らかのアドバイスを行っていた。それに対して「言ってもらったアドバイス」欄ではCの3日目午前、Dの3日目午前・午後、Fの3日目午後、4日目午前を除いて、学習者はバディから何らかのアドバイスを受けていた。教え合いが活発に行われていたと言える。

技能レベルが高いCとFは、「まだハの字になってるよ」「先生が言ったタイミングを思い出そう」(C)「足のすねをブーツにくっつけるといいと思います」(F)など、バディの相手の技術課題を踏まえたうえで、具体的な手がかりを与えることができている。

アドバイスができなかったとしているAは、技能レベルが低く、自信がないため自分より上手な相手

に積極的に発言できていない。Aは「言ってもらったアドバイス」は詳細に記述しており、AがかかわったバディではAに対する助言と励ましが主になっていたと考えられる。同様に技能レベルが低いEは積極的にアドバイスしようとしているものの、その内容は「うまい!!」など褒め言葉がほとんどで、相手の課題を踏まえたうえで技術的なアドバイスをするとはできていない。

EとFは短期大学1年生であるが、言ってあげたアドバイスを丁寧語で表現するなど、先輩に対して気を使っている様子が見える。

## 2. 学習者によるバディシステムの評価

すべての講習が終了したのち、バディシステムでの実習の感想を求めた。以下にその全文を記載する。

A 正直はじめは、少し大変だなあと思いました。でも最後には良かったなって思えました。一番はいろんな人と均等に仲良くなれることです。バディの人とリフトに乗らないといけなくていっぱいしゃべって仲良くなったので練習もやりやすかったです。上手な人にはたくさん質問し、本当にたくさん教えてくれました。バディとかでなかったら聞きにくかったと思うので良かったです。また、悩んでいる同士でバディだと、悩みを打ち明けられて良かったです。できないと、焦ってしまって、てんばるタイプなのでとても良かったです。でも…私はみんなにアドバイスできませんでした。どうやって言っているかわかんなかったし、アドバイスできなくて本当に申し訳なかったです。それなのに、私の質問に答えてくれたり、悩みあえたりして、バディであって良かったなと思いました。次のスキー実習でもぜひやってください。

B 毎回違う人とバディを組んでアドバイスし合いましたが、やっぱりコミュニケーションをとりにくいこともありました。苦手な場所やスキーのやる気の有無でこのアドバイスがうまくいかず、役に立たなかったり気まずくなったりもしました。でも「こうしたらどうだろう?」「そうなんだ。こうすればいいんだね。」と言ひあえ、お互いにやる気が向上し、結果が出て喜びあったりする面



表3 バディでの教え合いの内容

学習者とレベル	講習	バディの相手	言ってあげたアドバイス	言ってもらったアドバイス
A △	1日目 午前	B	まがる時などA(拇指球一土ふまず)の部分に力を入れると教わったが、そこ全体に力を入れようとするのは難しい気がしたので「親指だけに力を入れるといいよ」と言いました。親指に力を入れると自然とA全体にも力が入ると思いました。	まがる時にスピードが出たり、足がぐねぐねになってしまうことを言うと「まがる時に軽くひざを曲げるといいよ」と言ってくれました。はじめは足を曲げるのが怖かったけど、前に体重も乗るし、うまくコントロールもできてやりやすかったです。とても感謝!!
	1日目 午後	F	私はいろいろ聞くだけでアドバイスはあまりできませんでした。私はストックをもってこけてしまって、Fさんもこけてしまったので「ストックは軽くつくだけで、あんまりつかない方がいいね」と話しました。	カーブする時に、右の親指と左の小指に力を入れてまわるが、私は小指に力がいれなかったが、小指のことは気にしないで、斜面より下の方の親指だけ力を入れて小指の方の足はそろえるだけと言われてめっちゃやりやすかった。いろいろアドバイスをくれてわかりやすかった。
	2日目 午前	D	私は今日もいろいろ聞くばかりでアドバイスできませんでした。でも2人でいろいろ話し合えたと思います。	私は山足のズリズリができなくて悩んでいたら「谷足に力を全部入れて山足は本当にそえるだけでいいよ」と言ってくれました。そうするとできるようになりました。そしたら次のリフトで褒めてくれてめっちゃ優しかったです…感動。
	2日目 午後	F	私は何もアドバイスできませんでした。ごめんなさい。	いろいろアドバイスくれました。バランスをくずしてこけそうになっても、体重を前にかけてたら意外にたえれると教えてくれました。他にもアドバイスくれたり、励ましてくれたり、ありがとう!!
	3日目 午前	E	2人でハの字になるので話し合いました。「滑るほうの足に体重をのせた時にひざを曲げるとのりやすいよ」と言いました。	2人とも結構困ってて、2人でいろいろ話し合えて、悩んでどうしようかかったです。私たちはパラレルでハの字になってしまうけど、ハの字というよりひきつける足のつま先はひきつけられるけど、かかとはひきつけにくいのでどうしたらいいか考えました。
B ○	1日目 午前	A	カーブをする時に足首を曲げないように意識してひざを曲げると良いと言ってみました。	親指と小指の斜線部に力を入れることを言っていた時、指の先に力を入れる意識をすると上手くいくと教えてもらった。
	1日目 午後	C	ターンをする時にハの字になりやすい。左足がひらきやすい	スピードが速くなるとカクカクしたカーブになりやすいと言ってくれました。
	2日目 午前	E	スピードがゆっくりになりやすいから、ターンの時スキーの先っぽを下に向ける感じにすると速くなるよ。	パラレルターンのスピードが上がってくるとターンが丸くなくなってきている。力を均等に。
	2日目 午後	D	傾斜のはげしい坂になると力を入れる方の足がズリズリいってしまってこけてしまいやすい	シュテムターンの練習は、かんじがつかめるまで、ゆっくり平行ぎみのスピードでやるとやりやすい
	3日目 午前	F	未提出	未提出
C ◎	1日目 午前	D	ターンをする時に体重移動したらやりやすいとアドバイスしました。あと手を内側にもっていくと体重移動しやすかったです。	まだハの字にちょっとだけなってるよと言ってくれました。
	1日目 午後	B	まだハの字になっているよってアドバイスしました。カーブがまだまだ急だからゆるやかにカーブすると良いと言いました。	ハの字になっている時があること たまにかかどがついていけないことをアドバイスしてもらいました。

学習者とレベル	講習	パディの相手	言ってあげたアドバイス	言ってもらったアドバイス
C ◎	2日目 午前	F	ターンの時に足が平行になって上手だねってことを言いました。新しいゲレンデで先生もガスであまり見えなかったけど、先生が言ったタイミングを思い出そうと言いました。	特になし
	2日目 午後	E	ターンの時のストックの使い方が逆になっているから、右の時は右、左の時は左を使えば良いとアドバイスしました。	足が平行に出来てますねって言ってくれました。
	3日目 午前	B	スピードが速くてターンを急いでやってるからくの字になってるよ。先生が言った通り、少し下にすべる気持ちでターンすれば良いと思うよって言いました。	ストックが逆になっているからストックをコンパスの針だと思ってつくの間違えないよって言ってもらいました。
D ○	1日目 午前	C	平行の時にハの字になっているから、内側の足がもうちょっとついてくるように意識する。カーブの時ひざを曲げる	平行のまま曲がる時にひざを曲げて外側の手を内側に入れる感じだとするとやりやすい
	1日目 午後	E	ストックが左右でうしろにある方とまえにある方とあるので… カーブが小さいから大きくまわる時親指に力を入れる。	曲がる時に急に曲がっていないかを聞いたから大丈夫だった
	2日目 午前	A	ほぼ親指に意識をおいてすべたらうまくながれて足もそろ	特に何もなかったです
	2日目 午後	B	はじめはゆっくりすべってハの字→閉じるまでまてからカーブしたら…	特に何もなかったです
	3日目 午前	D	試験頑張ろう!! ってこと以外には特にありません	試験頑張ろう!! ってこと以外には特にありません
E △	1日目 午前	F	うまい!! どうやったらターンがうまくなるのか?	ターンの時、体を内側にする足の体重のかけ方
	1日目 午後	D	前のすべりよりよくなってた!! ターンがうまい!! どうやったら上手く止まれるか…。	目線は前!! 手がねこポーズになっている
	2日目 午前	B	ターンがうまい!! 小回りがうまい!! どうやったらうまくなるのか	スピードを出しても安定させて滑ったらいい 足をリズムにのってすべる
	2日目 午後	C	ターン上手いです	スピードがおそい ターンが小さい
	3日目 午前	A	パラレルターンを平行に頑張らしましょう 共に。	ハの字になってしまうから、かかとを意識して滑る
F ◎	1日目 午前	E	曲がる時に体の重心をたおす。例バイクに乗っている時にカーブを曲がる時と同じ感じ。	うまい うまい
	1日目 午後	A	すべっている時にへっぴり腰になりがちなので、足のすねをブーツにくっつけると思います。スキーの板を平行にする時は、外側の板を添えるだけ	平行になってたよ
	2日目 午前	C	今のとても上手に出来てましたよ	ストックつくのは曲がった時の外側のストック
	2日目 午後	A	バランスがくずれそうな時にハの字になりがちなので足に力をぎゅっと入れると思います。	特に何もなかったです
	3日目 午前	D	テストは何も考えないでがんばりましょう	特に何もなかったです

※ゼッケン番号下の記号は、技能レベルを表す。◎はグループ内で上位 ○は中位 △は下位を示す。

も多々ありました。このバディを組むというのは、ただ「しんどいね」「やりたくないね」と慰めあい、なあなな形になるか、上手くなりたい、でもできていないという2人が相乗効果で上手くなっていった、それを喜びあえる人がいるという嬉しさでまたやる気が出るという良い相乗効果を生むのかのどっちかだと私は思いました。

C 先生がアドバイスをお互いに行き来できるように言ったことで、相手にアドバイスできるように意識して人の滑りを見たりお手本の先生の動きや足の使い方、ストックのタイミングなどを注意してみることができました。また、人に見てもらふことによって自分もなおそうという気になるし、見てもらふことによって自分では分からないことが分かったりしました。また、リフトに乗っている時に話したり、上手な人のターンを見るのですごく勉強になりました。人のアドバイスがすごく的確で、自分にあったことですぐにそのターンをつかむことができることもありました。意識することができるので、初心者にはとてもよいと思います。でもカードを使用する機会が少なかったのもっとカードを使用できる方法があればよいと思います。

D バディを組んで一番よかったのはいろいろ話して仲良くなれたことだと思いました。あまりアドバイス出したり、言ってもらったりというのは少なかったかもしれないけど、今日の事とか単純にがんばろう！って言いあっただけで、次はまた頑張ってみようと思うようになったし、班の雰囲気も良くなったと思いました。コミュニケーションがすごくとれました。良かったです。

E 最初にコミュニケーション実習をするということを知った時、私は「いっぱい話してお互いに上手くなりたい！」と強く思いました。実際実習が進んでいく中で、なかなかうまくコミュニケーションが取れなかったなと感じています。私自身がうまく滑れなくモチベーションが下がっている時、声をかけてほしいな…と思いました。そうしたらスランプからも抜けれたかもしれません。結局は自分の問題なんです。私がうまく滑れてい

ないことで、みんなに迷惑をかけているのではないかなとも思いました。やはり、声かけ一つで上達の差があると思います。心の部分が元気になると、技術にも表れるはずだと思います。今回の実習ではそれが達成できなかったと私自身、感じています。

F 先生から教えてもらうだけでなく、友達同士でも教え合うのはとてもよかったです。でも、一つ思ったことは午前午後でバディをかえるのではなくずっと同じ人とした方がもっと欠点が見つけられると思います。

Eを除いて肯定的なコメントであり、バディシステムによる学習形態はおおむね肯定的に評価されていた。

以下、冒頭に示した教え合い学習の意義を枠組みに特徴的な記述をあげながら、本実践でのバディシステムの効果・課題を考察する。

#### 1) 課題を共有する仲間からの的確で頻繁なアドバイスによる効率的な技能習熟

「上手な人にはたくさん質問し、本当にたくさん教えてくれました。バディとかでなかったら聞きにくかったと思うので良かったです」(A)「人のアドバイスがすごく的確で、自分にあったことですぐにそのターンをつかむことができました。」(C)など、バディどうしのアドバイスが技能習熟に役立ったという記述がみられた。課題や感性を共有する仲間からの的確で頻繁なアドバイスによる効率的な技能習熟のプロセスがみられている。

#### 2) 「教える」—「教えられる」プロセスにおける技術認識と技能習熟の統一

「相手にアドバイスできるように意識して人の滑りを見たりお手本の先生の動きや足の使い方、ストックのタイミングなどを注意してみることができました。人に見てもらふことによって自分もなおそうという気になるし、見てもらふことによって自分では分からないことが分かったりしました。」(C)と、アドバイスするという課題は、学習者の観察力や技術認識を向上させることを示す事例がみられた。

#### 3) 自ら課題を解決し、学習を進めていくという自律的学習

「悩んでいる同士でバディだと、悩みを打ち明け

られて良かったです。できないと、焦ってしまって、てんぱるタイプなのでとても良かったです。」(A)「「こうしたらどうだろう?」「そうなんだ。こうすればいいんだね。」と言いあえ、お互いにやる気が向上し、結果が出て喜びあったりする面も多々ありました。」(B)「今日の事とか単純にがんばろう!って言いあっただけで、次はまた頑張ってみようと思うようになった」(D)など、励まし合いや、やる気の向上とその結果自ら進んで課題に取り組むという意義を見出す事例がみられた。

#### 4) コミュニケーションの促進

「一番はいろいろな人と均等に仲良くなれることです。バディの人とリフトに乗らないといけなくていっぱいしゃべって仲良くなったので練習もやりやすかったです。」(A)「バディを組んで一番よかったのはいろいろ話して仲良くなれたことだと思います。」(D)など、コミュニケーションの深まりや友人づくりに意義を見出す事例がみられた。しかし、一方で「苦手な場所やスキーのやる気の有無でこのアドバイスの問いあいがうまくいかず、役に立たなかったり気まづくなったりもしました。」(B)「私自身がうまく滑れなくモチベーションが下がっている時、声をかけてほしいな…と思いました。」(E)のように、コミュニケーションのむずかしさを訴えているものもいる。

#### 5) 異質協同で学ぶことによる能力観の変革

初心者対象とはいえ、本実践の対象者の技能レベルには違いがあった。技能レベルが上位の者から下位の者へのアドバイスのみならず、学習カードなどを利用した下位の者から上位の者へのアドバイスなど、異なる技能レベルの学習者の協同的な学習が成立していた。このように学習者が協同で学ぶことに

より「下手なものは下手」という固定的な能力観から「今の技能レベルは途中経過」「誰でもうまくなることができる」という発展的な能力観への変革が期待されるが、本研究ではこのような能力観の変革については確認することができなかった。

### 3. 技能の習熟

表4は、本実習における技能習熟テストの結果を示したものである。

本研究で対象となった6人の得点の平均値は、試験種目3種目全てにおいて、同じ手続きでグルーピングされた初心者班全体の平均値をうまわっており、初心者班として十分な技能習熟が行われていたということが推察される。

## V. まとめ

本研究の目的は、バディシステムと学習カードを用いたリフト学習を取り入れたスキーの授業実践が、学習者どうしの教え合いの活性化に結びつくかを実践的に明らかにすることであった。実験的実践の実施とその分析の結果、これらの方法が学習者の教え合いの活性化に一定程度結びつくことが明らかになった。

実践や学習者の意見の中から明らかになった今後の実践課題は以下のとおりである。

第一に本実践では、学習カードを用いることによって技能レベルに関係ない教え合いを促したが、実際には技能レベルが高い者から低い者へのアドバイスが質、量ともに充実していた。技能レベルが下位の者から上位の者へのアドバイスをさらに活性化するためには、現状や技術課題を明確にする観察の視点、リフトに乗る前の指導者によるチェック項目

表4 技能習熟テストの結果

学習者	シュテム	パラレル	ウェーデルン	総合得点
A	55	60	58	173
B	58	57	59	174
C	56	60	58	174
D	57	58	60	175
E	58	57	58	173
F	60	60	60	180
班平均 (n=6)	57.3	58.7	58.8	174.8
全体平均 (n=26)	55.5	55.9	56.7	168.2



の提示などをより徹底する必要がある。

第二に、友達づくりに意義を見出す者がいる一方で、コミュニケーションのむずかしさを訴える例もあった。とりわけ、短期大学1年生は、大学2年生に対して打ち解けることに苦労していた。短期大学生と大学生の人数を同数にする、休憩時間や夜のミーティングなどで、交流そのものを目的としたプログラムを実施するなどして、教え合いをより円滑にする場づくりを行う必要がある。

第三に、第一・第二にみられるような、技能レベル下位の者からのアドバイスや、1年生から2年生へのコミュニケーションのむずかしさは、学習集団としての未熟さを示している。日常的な人間関係に左右されない、技術認識を介してお互いを高めあう形での学習集団の高まりを保障するためには、学習者ひとりひとりが「教え合う中身」つまり技術認識をより鮮明にする必要がある。そのためには、実習要項に掲載されている技術解説テキストをさらに充実させることや、夜のミーティングなどでのテキストの積極的な活用などが必要である。

第四に、学習カードを活用した教え合いは見られていたが、Cが指摘しているように、十分に活用できたとは言えない。カードの内容を実習のプログラムに即して再構成する、アドバイスの手がかりになりそうな技術ポイントをカード化する、携帯用端末を使って動画を用いるなど、より使い勝手の良いアドバイス用ツールを開発することが今後の課題である。

## VI. 今後の課題

本研究は、スキー実習における学習者どうしの教え合いを活性化する方法としてのアイデアを、実践的に確かめようとする試みであった。対象者は6人のみであり、ここでの成果はあくまでも事例的で、これらをただちに一般化することはできない。対象者数を増やすこと、介入群と対照群をもうけて成果の比較を行うなどを通して、より客観的なデータをもとに考察することが今後の研究課題である。

## 謝 辞

本研究は、文部省科学研究費補助金（課題番号19300212）の助成を受けたものである。

## 引用文献

1. 出原泰明. 異質協同の学び—体育からの発信—. 73-130, 創文企画, 東京, 2004.
2. 野老稔, 島田博, 二宮恒夫, ほか. 授業「スキー実習」に関する研究 I. 武庫川女子大学教育研究所研究レポート, 23, 69-151, 1999.
3. 中西匠, 會田宏, 野老稔, ほか. スキー実習におけるグループ・ローテーション指導の効果について. 武庫川女子大学紀要人文科学編, 45, 73-82, 1997.
4. 中西匠, 二宮恒夫, 行森光, ほか. スキー実習におけるグループローテーション指導の効果について (2) —中級グループでの試み—. 武庫川女子大学紀要人文科学編, 46, 55-63, 1998.